（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　湯浅万紀子

本論文は、科学館やサイエンスセンターが、自然史博物館や歴史博物館や美術館などと異なり、基本的に標本や資料を持たないミュージアムであり、それゆえに展示物と観客との間に人を介在させた実験や体験の場、あるいはコミュニケーションの場であることを重視する特性に注目し、そこで展開されてきた教育プログラムの評価方法を検証したものである。

従来のミュージアム研究では科学館を研究対象とするものが少なく、論者自身による現場での調査を踏まえた結果、本論文は新たな研究領域を切り開くことになった。また、昨今、ミュージアムの活動評価がさまざまに求められている。教育効果という容易には数値化できない活動を「質」の面から検討する本論文は、こうした現代社会の課題に応えたものとなっている。

本論文は３部７章で構成される。第１部は、科学館における教育プログラムの目的と意義を探るとともに、日本の代表的な３つの科学館、すなわち国立科学博物館、科学技術館、日本科学未来館を例にとり、それぞれの建設の歴史的な背景、活動の比較、教育プログラムの実態を明らかにする。その結果、科学館の使命は知識の伝授ばかりではなく、論理的思考の開発にもあり、それが科学館の存在意義にほかならないとする。これが、その後の議論の前提となる。

第２部では、教育プログラムの評価方法が検証される。国立科学博物館と科学技術館の事例が詳細に分析され、さらに科学館以外のミュージアムでの評価の試みが紹介される。しかし、第１部で対象とした日本科学未来館が、ここでの分析から外れたのは不適切だろう。第２部の結論は、来館者へのアンケート調査を中心とした活動評価では、彼らに及ぼす教育プログラムの長期的な効果を明らかにできないという点にあり、そのために、論者は利用者の記憶に着目する。現在の来館者の未来における教育効果を知るには、過去の来館者が現在どのような影響を受けたかを測定すればよいという論者の仮説は、本論文の要となる。欧米ではミュージアム体験の記憶がどのように研究されてきたかを整理し、問題点を指摘し、修正案を提示する。

第３部は、論者による評価の実践報告である。2001 年から科学技術館で続けてきた調査研究「記憶の中の科学館」は、すでにミュージアム関係者から高く評価された実績を有する。

本論文は、科学館に向けた提言で終わり、論者が本研究科で学んだ文化経営学にふさわしい方向性を示している。提言はなお未熟で、これをさらに実践可能なものへと深化させることが課題として残るとはいえ、本論文が示す新領域開拓の意義を認め、かつ論者が続けてきた実践活動は今後の研究にさらなる発展をもたらすものと期待して、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。